

的場というもので、そういうものがそこで志向されているのではないのか。そういう意味で、根源学という形で、我々が学問の意義を問い返してみることがそこにあるのではないだろうか。殊に私にとっては、この学校に縁の深い真宗学と言われる立場。真宗という言葉自体にしても、それは歴史的にそういう言葉で呼ばれるような因縁があったのではあるが、その「真」ということが何であり、それを「宗」とするということが何があるかと言うときに、やはり、その真宗学の立場というものは、根源学としての真宗学の立場と考えてもいいものがそこに在るのではないのか。だから、この大学というものの根源的立場というものが、やはりそうした場に問題として横たわっているのではないのか。親鸞という人の心の中に生まれてきた絶対他力の世界と言われる根源的な世界、その上に成立してきた学問の場。そして、そこで東洋、西洋の、また仏教非仏教の色々な学問というものが一つの学の場として成立していくとするなら、そういうものを生み出しつつ、そういうものの一切を支えていく根源的な学の場、そういうこの大学の場合の一つの自覚の問題というものはあるのではないのだろうか。(文責 恒松)

## 日本語の助数詞

本学助教授

片岡 了

日本語では数量表現において、対象の種類に応じて、助数詞を

こまかに使いわけける。日本語の語彙は總体的にみるとやはり分析的な面が強いといえるであろうが、その中で、助数詞が類別性をもち、分析的であるというのは注目すべきことである。しかし、ひるがえって考えると、現代語で用いる「冊、枚、本、台、匹」などという助数詞は字音語であって、借用語である。そこでもしこれを漢語によらずにやまとことばで表現するとしたら、どういう語が用いられるであろうか。少なくとも現代語では、これらを各異なった和語で表現することはできないであろう。そこで、日本語の数に関する表現が古来どのようなになされて来たかを考えてみることにする。

上代語の例を見ると、万葉集の中に、

比等己恵(一声)、比登禰呂(二領)、比登比(一日)、比等米(一日)、比登欲(一夜)、不多利(二人)、布多都(二つ)、伊都等世(五年)、以都母等(五本)、奈奈勢(七瀬)、毛毛可(百日)、毛母久麻(百隈)、毛母布禰(百船)、伊保都(五百つ)など仮名書の例の他に、おそらくは訓読すると考えられる。

一瀬、一坏、一重、一峯、二綾、三歳、五柴、百木、五百機などが拾い出される。これらのうち、「フタリ、モモカ、ヒトヘ、フタツ」などにおいての、「リ、カ、ヘ、ツ」のごとき要素については、一応当代の用法としては、非独立的な接尾辞と考えられる。ところが、その他の「コエ、ネロ、ヒ、メ、セ、クマ、フネ、アヤ、トシ、シバ、キ、ハタ」などはいづれも独立性のある一語の名詞であり、それに「ヒト、フタ、ミ、イツ、モモ、イホ」などの非独立性の基本数詞が修飾語的にかかっている。(こ

のうちの或るものは独立用法をもつものもある。「一二之目」<sup>ヒツツノメ</sup> 3827のごとくであるが、しかしかかる例は極めて稀である。その「ヒトコエ」などの構造は、「イツシバ」「モモフネ」「モモキ」「イホハタ」などの例において確かめられる。即ちこれらにあつては、その上位要素たる「ヒト、イツ、モモ、イホ」などが、その下位要素たる「コエ、シバ、フネ、キ、ハタ」などの名詞を修飾する関係にあるのであつて、その上位要素と下位要素の関係は、「ヒトツ」「フタリ」などにおける「ヒト」「フタ」の「ツ」や「リ」に対する関係とはことなる。基本数詞「ヒト」「フタ」など）はこの時代には一般に非独立的であり、それが下接する名詞を修飾している形式である。それに対し、「ツ、リ、カ」などは、その語源は未詳であるが、少なくとも当代における用例では非独立的な要素であり、一応接尾辞と考えてよいであらう。そこで、この時代の数の表現は、大別二通りに分けて見ることが出来る。一は「ヒト、フタ」など非独立性の基本数詞が下接する名詞を修飾する形式であり、いま一は「ヒト、フタ」などが、同じく非独立的な「リ、カ、ツ」などと結合して、そのまゝまりが、数表現の一語の名詞となり、それが数えようとする対象物とは分割し得る形で数表現にあずかる形式である。

このように二種類の形式に分けて見ることが出来るが、そのうちの後者は、その「ツ、カ、リ」などと結合した形で、一単語（派生語）としての独立性を得るから、その結果、「布多都能伊斯（二つの石）」（八三）、とか「奴麻布多部（沼二つ）」（五五）などのように対象の語と分離されて働きうると同時に、それはまた

対象の語と重なって複合語にもなり得る。それが「伊保都登里（五百つ鳥）」（四二）や「一棚橋」「比登都麻都（一松）」の例である。

上代における数表現の形式は大凡右の如くであるが、次にその後者の非独立的接尾辞にどのようなものがあり、それらが、どういう内容をもったかが問題になる。そういう要素として、一例をいへば「つ（箇、歳、銭）」「か（日）」「たり（人）」「き（匹、疋、頭、寸）」「きだ（段）」「さ（箭）」「へ（重）」のごときものが考えられる。但しこれらの中にもその語源にたしかえれば独立の名詞であつたというものもあるであらうが、文献資料の上では独立性を失なっているからここではしばらく接尾辞として見て行く。さてこれらの大部分は、かなりはっきりした対象の範囲をもつが、その中で対象の範囲が最も広く、曖昧なのが「つ」である。そこで、古事記と万葉集の中で、「つ」によって対象とされるものを拾ひ出すと、「石、鳥、沼、真珠、松、勾玉、金鉏」（以上仮名書例あり）や「岸、海、山、石罅、蛙、虎、橋、弓、矢、綱、舶」などがあげられる。これらによってみると、上代語で「つ」の包含する範囲は相当に広いことがわかるが、そのことは、元来「つ」に対象を限定し、類別する性格がないことを示すのではないか。即ち「つ」は、非独立的な基本数詞と結合して、独立性をもった一単語（派生語）を構成するだけの働きしかせず、類別を本来の性格とする語ではなかったのではないか。

さて、上代語の数表現はおよそ右のごとくであるが、この大勢は中古に入っても変らない。ただ、中古になって仮名文の用例が

増すから、そのあり方がもつとはつきりして来て、「ひとてら(一寺)」「ふたき(二木)」「ひとゑぶくろ(一餌袋)」「ひとはしら(柱)」などの形があり、これらを見ると、「ヒト、フタ」の部分が直接名詞を修飾するさまがよくうかがえるのである。そしてその一方で「つ」の適用例も拡大されて来て、「飛ぶ車一つ、かはり一つ、ひとつの所、ひとつのたから、すももを二つ、まなこ二つ(竹取)」「丑三つ、ひとつ子、ひとつの春、瘡一つ(勢語)」「扇ひとつ、思ふこと一つ、衣一つ、蓑一つ、家二つ(大和)」「牛車一つ、帯三つ、馬二つ、筆二つ(落窪)」「鏡一つ、歌一つ(土佐)」「すざび(芸)一つ、にくきかた一つ、指一つ、もののけ一つ、琴ひとつ、琴の曲一つ、台一つ、(総合の番数)一つ、紐一つ(源語)」「色紙一つ、文字一つ、蛇一つ(枕)」「不断経二つ、御説経四」(寝覚)のごとくである。

しかしこの段階ではまだ現代語のような形式とはことなっていて、「つ」による表現を別にすれば、やはり先述のごとく、基本数詞がじかに名詞を修飾する形がかなり多い。それが中世に入ると、数多い助数詞が、漢語を用いてあらわれて来る。「一位、一種、一瓶、一辺、一番、一流、一猷、一端、一驕、一盃、一束、一把、一行、一説、一言、一段、一端、一張、一管、一箇、一帖、一卷、一冊、一本、一枚、一返、一艘、一疋、一両、一斤、一分、一足、一羽、一俵、一服、一面」その他極めて多い。この中には前代迄やまことばであらわしていたもので漢語に変えられたものがある。先に見た「つ」による表現もそれであって、この結果、「つ」による表現の範囲がせばめられて来た。また、前

代まで行つて来た、名詞に基本数詞を直接冠する形式をあまり用いなくなつて、現代語の表現に近い状況があらわれて来た。いわゆる非独立性の接尾辞としての助数詞が多量に用いられた。その結果として対象の種類に応じて助数詞を分析的に用いるようになって来るのである。しかし現代語でも、種別の立てにくい対象にはしばしば「つ」を用いて表現することがある。それは実は先に見た如く、上代からある日本語の一つの形式なのである。

なお、日本語の助数詞に中国語の陪伴字(類別詞・量詞とも)との関係も問題になるが、中世以後はともかく、上中古についてはその影響関係を直ちに言うことはできにくいと思われる。上古における日本語の助数詞はほとんどやまことばによつていたのであり、その形式も上を見たとく、元来基本数詞を直接名詞に冠した形から出発しているようであり、その名詞の部分がやがて独立性を失つて助数詞化して来るものと見る事ができる。したがって、その語法的な表現構造が中国語の陪伴字のあり方とはことなるからである。それが中世以後、個々の語としては漢語を借用したというにとどまると見るべきであろう。

## ベートーヴェン像

本学助教 滝 本 裕 造

音楽とは有機体であり、生命体である。将来、大きく生長するための生命力が、その中に宿っており、それによって、いわば自